

多文化共生社会をめざして

—— ブラッセル日本人学校と補習校との連携授業による人権・平和学習の実践 ——

前ブラッセル日本人学校 教諭

熊本県合志市立合志中学校 教諭 アクスト さくら

キーワード：多文化共生、差別、人権・平和、補習校、連携授業

1. はじめに

恥ずかしながら私は小学3年生になるまで、日本が海に囲まれた島国であるということを知らなかった。海に向こうにはたくさんの国々があり、そこで人々がどのような暮らしをしているのかを知るよしもなく、近所を走り回っていた田舎娘であった。大学時代に初めて外国へ行くと、それまで「海外生活はきらびやかで華やかなもの」と勝手に想像していた自分の考えが、必ずしもそうではないことを実感した。両親が日本人であっても、幼少期から海外に住んでいるために日本語が話せず、周囲から「どうして日本語が話せないの？」と何度も尋ねられながら育っている子の存在を知った。また、自分のことを「バナナ」と言って卑下する少年にも出会った。見た目は「黄色」、つまり自分の外見は黄色人種であるが、中身は「白色」、つまり考え方は白色人種という意味である。人種差別になぞらえて自分をそう表現する少年の自己肯定感の低さを感じた。

違いを認め、多様なものの見方・考え方をもちことのできる子の育成に携わりたいという願いのもと、ベルギーブラッセル日本人学校で3年間（2015年4月～2018年3月）海外に住む子どもたちと関わる機会をいただくことができた。ベルギーに在住する日本の子ども達（ブラッセル日本人学校全日制）と日本にルーツをもつ子ども達（ブラッセル日本人学校補習授業校）との連携授業によって、共に学び、考え、表現することを通して、ベルギーに住んでいるからこそ気づくことのできる違いや児童生徒のアイデンティティ確立をめざした。人権学習、平和学習の大切さ、及び必要性和児童生徒の変容について研究することは、世界各地でテロ事件が頻発する現代社会において、今、求められている多文化共生の社会づくりにつながるのではないかと考える。

2. 補習校との連携授業づくり

(1) 連携授業のねらい

ブラッセル日本人学校は、教育目標を「自ら考え、豊かに表現し、世界の人々とともに問題を解決していく児童生徒の育成」と掲げ、教育活動を行っている。全日制と補習校の児童生徒は、同じ教室と同じ教科書（国語、算数・数学）を用いて学習しているにも関わらず、双方の児童生徒が会うことはほとんどない。そこで、ベルギーと日本という異なる文化でくらしながらも、身近な同級生同士が交流する場を設けることにより、互いの日常生活の様子や習慣を紹介し、その違いや共通点に気づき、お互いを受け入れることができるのではないかと考えた。

(2) ブラッセル日本人学校補習校の実態

補習校職員への聞き取り調査を通して、児童生徒の家庭環境、及び補習校に通わせる保護者の理由や目的は、多岐にわたることが明らかとなった。

○両親がともに日本人であり、ベルギー在住が一定期間である場合

子どもに現地校を経験させたいという思いと日本語力や日本のことを忘れないで欲しいという親の願い。

○両親の一方がベルギー人で他方が日本人である国際児、かつベルギー永住が選択肢としてある場合

子どもが現地校に通う一方で日本語力や日本のことを学んで欲しいという親の願い。

他にも、日本人学校全日制に通わせたいが、地理的に住居と学校が遠く、土曜日にしか通わせられないという

実態や、ベルギー人と日本人の国際児であっても、母親が日本人で父親がベルギー人の場合は、家庭での母子の会話が日本語であるため、補習校からの宿題や課題にも母親が積極的に支援することができ、必然的に子どもの日本語力が高くなる傾向が見えた。また、全日制の児童生徒が月～金曜日の5日間かけて学ぶ内容を補習校の児童生徒は、土曜日の半日だけで習得していかなければならないため、授業の進度はとても早く、全日制の約5倍のスピードで進む。そのため、担任や授業者の入念な授業計画や準備、実践等が必要不可欠であり、児童生徒には多くの家庭学習も課せられる。しかしながら、登校してくる子ども達は、補習校の友達や先生と会うのを楽しみにしており、多くの子ども達が明るい表情で登校している。

さらに、ベルギーに在住する国際児をもつ日本人母への聞き取り調査を行った。質問内容は、【①ベルギー在住期間。②ベルギーに住むようになったきっかけ。③日本人としてベルギーに住んでみて、住みやすいと感じること。④日本人としてベルギーに住んでみて、住みにくいとと感じること。⑤ベルギーにおける多文化共生について。⑥子どもについて。】とした。以下回答一覧である。

年齢	40代女性	40代女性	50代女性	60代女性
①	5年	13年	27年	27年
②	結婚	結婚	結婚	結婚
③	<ul style="list-style-type: none"> ・考え方や生き方が自由。 ・人と競争しなくてよい。 ・自分の好きな格好ができる。流行に惑わされることがない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・公用語が三カ国語あるため、おそらく英語が完璧でなくても、比較的理解しようとしてくれる人が多い。 ・柔軟性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の人生を自分で切り開いていかないといけない分、自分らしく生きられる。 ・個人主義である。 ・お歳暮やお中元など煩わしくない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いが干渉しない。 ・自分の個性や主張を大事にするので、自分が強くなっていける。 ・緑が多い。 ・テンポがゆっくり。
④	<ul style="list-style-type: none"> ・郵便事情の悪さ。 ・不規則な公共交通機関の運行状況。 	<ul style="list-style-type: none"> ・不規則な公共交通機関の運行状況。 ・ストライキ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・公衆道徳の観念がない。 ・親が子どもに教えていく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・テロ関係の事件。 ・民族間の問題による近隣同士のトラブル。
⑤	<ul style="list-style-type: none"> ・個人と地域による差が大きいように感じる。 ・オーデルゲム地域は、フランス人の次に多い外国人が日本人であるため、比較的親日的な印象を受ける。 ・移民や難民、低所得者居住区では、偏見や差別を受けることもある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・比較的オープンな印象がある。昔はイタリアの労働力を必要としたし、トルコ人も移住している。 ・ラシズムの人達はアジア人を嫌う傾向がある。 ・ベルギーに来て自分達の仕事を奪ってほしくないと思っている人達もいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・バランスの問題である。外国人がたくさんいすぎると、それが脅威になって、自分達の存在を強調しようとする。 ・移民が多い地区で、自治体が移民に対して良い政策をするのを、快く思っていない人達もいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・統合的な方ではないかと感じる。ベルギーも小さな国であって、オランダについている時代もあったから。 ・ベルギー人は警戒心が強いので、かなり深い関係にならないと、互いのことを知ることはできない。
⑥	<ul style="list-style-type: none"> ・2歳半幼児 ・両国籍を所有 ・父：フラマン語 母：日本語 家：区別して使用 ・フラマン語の幼稚園在籍。 ・自分の考えをきちんともって、自分のことをきちんと選択してほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・10歳児童 ・両国籍を所有 ・父：フラマン語 母：日本語 家：区別して使用 ・フラマン語の現地校と日本人補習校に在籍。 ・ベルギーにいながらも日本の文化や情報に興味を持ってほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・20歳、22歳大学生 ・両国籍を所有 ・父：フラマン語 母：日本語 家：フラマン語 ・外国人のいない時代だったから、学校でかわれた時があり、校長先生に伝え対応してもらった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・27歳成人 ・ベルギー国籍 ・父母：日本語 家：日本語 ・現地の幼稚園、小学校に通った。小1～小6の途中まで日本人補習校に通っていたが、小6の途中から全日に転学。

(3) ブラッセル日本人学校と補習校との連携授業の実際

①小学部1年の実践

まず始めに、補習校校長をゲストティーチャーとして招き、補習校児童のことを紹介していただいた。補習校とは、どんな学校かを知り、補習校児童の写真を見た全日の児童からは、髪の毛の色が違うことや、目の色や肌の色が違うことなど、外見上の違いに気づいた感想が挙げられた。

次に児童たちは、会える日（連携授業の日）を心待ちにし、その思いをメッセージカードに書いて、学年の掲示板に掲示した。補習校の児童たちからもメッセージの



掲示板の活用

返事もらい、互いの気持ちを日本語の文字を介して表現し、事前交流をすることができた。連携授業には全日39名と補習校17名の児童が交流した。補習校との連携授業を通して、児童たちに身に付けてほしい力として2つのことをねらいとした。

- 日本とベルギーの生活や習慣、言葉の違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気づくこと。
- 全日、補習校での学びを生かし、日本語でコミュニケーションすることによって、ベルギーに住んでいながらも、日本人学校で学ぶ意義と今後の日本語習得の意欲喚起へとつなげること。

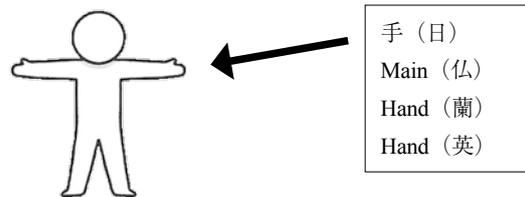
以上のことをふまえて、連携授業の生活科の時間には、互いの学校生活や生活の違い、日本語とフランス語、オランダ語の違いに気づくことをねらいとした授業計画を立てた。初めは外見上の相違点しか見つけられなかった児童たちであったが、十分に時間を確保することにより、内面的な相違点を発見することができるようになってきた。

【課題1】日本人学校と現地校の時間割やお弁当の写真を掲示し、相違点を見つける。

- 外見上の相違点
 - ・デザートがある。
 - ・ジュースがついている。
- 内面的な相違点
 - ・お弁当を食べる時間は同じ。
 - ・みんな仲良しでお弁当を食べているだろう。
 - ・日本人学校の子供達は、はしを使って、現地校の子供達は、ナイフやフォークを使って食べている。

【課題2】型どり活動をして多言語にふれる。

- ①同じグループの友達の体を順番に型どりする。
- ②体の部分の名称を、自分が知っている言語（日本語、フランス語、オランダ語、英語等）を使って、表現する。
- ③型どり用紙に書き込んでいく。



②中学部1年の実践

ブラッセル日本人学校に通う児童生徒は、家庭的経済面において、比較的恵まれた環境にある子ども達が多い。中学部1年生も同様に、自分が育った環境が基準となり、経済的に厳しい状況下にある子どもを取り巻く環境を知らなかったり、自分の中にある差別心に気づかなかったりした。また、中学部入学前の人権学習においては、個々に差が見られ、生徒一人ひとりの人権感覚にも個人差があった。被差別状況におかれている人達のことを「仕方がない」「自分の責任だ」という短絡的なものの見方で済まそうとする生徒もいた。自分たちの置かれている環境外の世界を見る目が乏しかった。

まず世の中にはどのような差別が存在するかを考えた。補習校との連携授業では、全日制生徒から自分たちが

調べた人権テーマについて発表し、質疑応答の時間を設けた。発表の際には、相手意識をもち、手作りのフリップを用いたり、クイズ形式で発表したり、また劇を通して表現するなどの工夫を凝らした発表ができた。その後、各グループでベルギーの画家、ジャン＝ミシェル・フォロン（「人権パスポート」の挿し絵を担当）の絵を参考に人権画の製作に取り組み、自分たちの人権画を描くことで学びを深めた。

③ 中学部 3 年の実践

中学部 3 年生は、5 月にドイツ、ベルリン・ポツダム方面へ平和学習の一貫として修学旅行に行く。年間を通して平和学習に取り組み、連携授業では、第二次世界大戦を経験し、父親が強制連行され収容所に入られたというベルギー人の Simone さんをゲストティーチャーとして招き、大戦時のベルギーの様子や人々の暮らしについて貴重な話を聞くことができた。その後は、Simone さんから教わった 6 つのキーワード（心を開きなさい、憎まない、本を読みなさい、食べ物や水を大事にしなさい、耳を傾けなさい、言葉を学びなさい）とこれまで学んできた平和や社会について、今の自分にできることを、ワールドカフェ形式で考えや意見を交流した。戦争が最大の人権侵害であるということを変更して感じた時間でもあった。

3. おわりに

2015 年 11 月 13 日にパリ同時多発テロ事件が起こった。事件後、テロ関連でブラッセル日本人学校も 2 日間の臨時休業となった。ブリュッセル市内は地下鉄が閉鎖され、市民は外出を控える日々が続いた。そんな中、食料品を買いに我が子を連れてスーパーへ行くと、レジの店員さんが子ども達へ「勇気ある買い物によく来たね」と言って、笑顔でチョコレートを渡してくれた。誰もがテロという見えない恐怖の中にいる時、人種や国籍を問わず、相手を励まそうというベルギー人の優しさを感じた。今、まさに世界の平和を願い、一人ひとりが何を考え、どう行動するのかが問われている時代である。多文化共生をめざす社会のなかで、移民や難民、民族間が事件や問題を起こすたびに、移民・難民受け入れ反対デモ運動や政策の見直しが注目される。ヨーロッパは、真の多文化共生社会をめざしながら、試行錯誤し、一進一退を繰り返している現状である。それは、ベルギーが繰り返し外国に侵略されながらも、言語問題と向き合い、現在に至ってきた歴史に似ているものを感じた。

児童生徒は、ブラッセル日本人学校で学びながら、ベルギーにいるからこそ出会える現地教材をとおして、本物に触れ、国際的視野に立って自他を見つめ、幅広いものの見方、考え方を習得していった。特に任期 3 年間で、毎年、補習授業校の児童生徒と連携授業を実施できたことは、私にとっても子ども達にとっても大きな財産となった。どこの国に住んでいようと、一人ひとりの暮らしが心豊かなものであれば、人種や国籍、文化や宗教が違っていても、共存は可能ではなからうかと私は信じている。そこには、国の将来やグローバル世界をやがて担っていく子ども達への教育が、より一層重要なものであると同時に、質の高い教育が必要不可欠であると感じる。子ども達には、自分自身を一人の人間として誇りをもって生きて欲しい。自己肯定感が高まることによって、他者との関係をより良く築いていけるのではなからうか。今後も継続的な自己研鑽を積み、目の前の子ども達へたくさんの愛情を注ぎたい。また、このような貴重な経験を得ることができたことに心より感謝の意を表す。